

「二〇一七年度大会シンポジウム」特集 日本思想史学会創立五〇周年記念シンポジウム第一回…対立と調和

対立と調和

高橋 文博

日本思想史学会は、一九六八年に創立され、二〇一八年に創立五〇年を迎えた。すなわち、日本思想史学会は半世紀に及ぶ歴史をもつことになった。

大会委員会は、この大きな節目にあたり、日本思想史学の意義を改めて問い直す意図のもとに、二〇一七年度と二〇一八年度の二大会をセットとして、創立五〇周年記念シンポジウムを企画した。基本的な考え方は、日本思想史学が、国際的視点のもとに、現代社会へのメッセージ性をもたなくてはならないということである。思想は、人間が生きていく上で、さまざまな課題に応答しつつ、何らかの解決をしようとする営みにおいて生起する。

人間は、生存を遂げるためにも、生存を危うくするものの克服という課題を抱えている。生は、死との緊張、矛盾、対立とともに展開しているのである。また、人間の生は、人と人との関わりの中で展開し、人と人との関わりは、争いと調和という課題を伴っている。

さらに、人間の生は、生の意味を問いつつ営まれていく。生の意味を問う営みが、人びとの生のあり方の差異、葛藤、対立を生み、そのことが、時に人々の生存を危うくする事態にもなる。

人間的生は、さまざまな次元における課題に応答しながら、さまざまな矛盾、葛藤、対立を止揚、統合するべく営まれているのである。思想を、人間的生における矛盾、葛藤、対立を止揚、統合する中で生起する営みと捉えた上で、日本思想史における「対立と調和」という総合テーマを立てた次第である。

「対立と調和」という総合テーマのもと、「宗教と社会」、「アジアと日本」、「日本思想とジェンダー」の三つのサブテーマを立てた。これらが、総合テーマの内容を網羅しているわけではないにしても、現在の日本思想史研究の中で、ホットな関心の集まりつつあるものであることは確かであろう。

こうした企図のもとで実施されたシンポジウムは、比較的若い方々による意欲的な報告と、それにもとづく活発な討論が展開されたのであり、日本思想史学の新たな未来を拓く貴重な意義をもつたと考える。

(就美大学教授)